

晩秋の夕日が沈む頃、赤神山から望む南東の山なみが、まれに真っ赤に染め上がる。紅葉の赤に夕日の赤が重なる、秋のほんの一瞬の光景だ。「山が燃えたようになる。毎日ここで暮らす者しか知らない景色です」。奥田宮司は、少し得意げに笑う。

宮司がこの山に来たのは二十七歳のとき。伊賀の生まれで、太郎坊を代々預かる家系ではなかったが、実家は神職で、大学の縁で来宮した。初めて見上げた太郎坊宮は「なんとも高いところにあるんやな」。岩山の中腹に、社殿がちよこんと乗る。平地の神社とはまるで違う空気に「ああ、これは信仰の山やなと思いました」。「勤め始めの頃は、普通の新人社員みたいなもの」と笑って、以来、四十年になる。

山の上からは、季節が見える。春、田に水が張られると、蒲生野一面が「水鏡」になる。「琵琶湖が広がったみたい」、水面がわっと広がる。やがて緑になり、黄金になり、雪の白になる。霧の朝は舞台の下に雲海が広がり、満月の夜は月あかりが蒲生野を照らす。

この山は、気軽に登れる山ではなかった。かつては拝殿から上が神域。舞台のあたりは「近江高天原」と呼ばれた聖地だ。人々は中腹の拝殿まで登り、御扉

第二回

「宮司が語る、天狗の山と生きる」

阿賀神社（太郎坊宮）登録有形文化財修復委員会

を開けて岩山の上を仰ぎ拝んだと伝わる。山は修験の行者が入る、畏れの山だった。明治になって舞台が架けられ、誰もがこの眺めに立てるようになった。舞台とは、畏れの山と人をつないだ場所なのだ。

「この山の始まりは、古すぎて分かりません。私はしばらく預かっていただけ。建物だけ残っても、それは神社やない。人が手を合わせてこそ、生きた神社や」。

この山は、時代の荒波の中でも手を打ってきた。先代の村田宮司が参集殿を建てたのは昭和四十八年。高度経済成長とオイルショックが交差した年だ。そしていま、失われた三十年、コロナ禍、相次ぐ戦禍と物価高。再び先の見えない時代に、宮司は百四十六年目の大修復を決めた。

「預かった者の務めとして、ちゃんと手を入れて、次へ渡したい」。天狗の山と生きて四十年。時代が揺れるときこそ、山は動く。宮司の覚悟は、静かであたたかい。

天狗たちの大普請



修復を待つ懸造（かけづくり）の舞台